The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の受身文と中国語の“被”構文の意味機能と談話機能 ： テレビドラマの話し言葉を対象に
Author(s)	陳, 冬姝
Citation	日本語・日本文化研究. 2018, 28, p. 106-117
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71152
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語の受身文と中国語の“被”構文の意味機能と談話機能
—テレビドラマの話し言葉を対象に—

陳冬姝

1. はじめに

(1) a. 客が人に殴られた。
　　b. 客人 被 人　打　了。
　　客　被　人　殴る　le

（1）a と（1）b はそれぞれ日本語の受身文と中国語の“被”構文[1]である。いずれも「被動作者」の「客」が主語の位置に立ち、「動作主」の「人」が格助詞の「ニ」、あるいは、介詞の“被”でマークされ主語の後ろの位置に置かれている。（1）a と（1）b のような特徴を構文的図式で簡単に示しておくと、以下の（2）と（3）のようになる。

(2) 日本語の受身文：　X（が/は）　+　Y に　+　V -are-/-rare- (ru)
(3) 中国語の“被”構文：　X　+　被・叫・让・给 + Y　+　VP

また、（1）a と（1）b は構文上の特徴が似ているだけではなく、意味上の特徴についても被動作者が出来事から影響を受けていることを表している点で共通している。そのため、日本語母語話者向けの中国語教育においても、中国語母語話者向けの日本語教育においても、日本語の受身文は中国語の“被”構文に対応すると教えられることがしばしばある。しかし、筆者が実際収集してきた話し言葉における受身文（4）a と“被”構文（5）a をそれぞれ直訳してみると、いずれも中国語の自然な“被”構文あるいは日本語の自然な受身文にはならないことが分かる[2]。

(4) a.　星野結夏：横山さんに会った？お店の、本社から来た人。すごい仕事できんの。
　　濱崎光生：ちょっと挨拶された。（『最高の離婚』）
　　b.　滨崎光生：＊ 我　被　横山　打了招呼。（筆者訳）
　　僕　被　横山さん　挨拶をした

(5) a.　邱莹莹：啊樊姐，你赶紧吃吧，这条鱼　都　被 我　吃　光　了，
　　この魚　もうすぐ　被　私　食べる　なくなる　le
　　你再不吃可就没有了。（《欢乐颂 2》）
　　b.　邱瑩瑩：姉さん、早く食べなさいよ。?? この魚、私に全部食べられてしまうよ。
　　早く食べないと、なくなるから。（筆者訳）

以上から、日本語と中国語において、受動表現が果たす機能は異なるのではないかという疑問が生じる。陳（2016）では対訳データにおける日本語の受身文を中心に、なぜ中国語の

能動文に対応するかについて談話構造の観点から分析した。本稿では、日本語の受身文と中国語の“被”構文の両方に着目し、その主語と述語に対する量的調査を通して、日中受身表現が談話の中で実際どのように使われているのか、また機能がどう異なっているのかをより明確な形で記述する。その結果、日本語は「意味機能」よりも「談話機能」を重視するが、中国語は逆に「談話機能」よりも「意味機能」を重視することが明らかになった。

2. 日本語の受身文の機能

(6) a. 太郎が花子を殴る。
　　b. 花子が太郎に殴られる。

（6）a の能動文と（6）b の受身文は同じ出来事を表現しているが、主語はそれぞれ、動作主の「太郎」、被動作者の「花子」と異なっている。また、(6)a の述語の「殴る」と（6）b の述語の「殴られる」を見ると、能動文に使用されている形式は無標で、受身文に使用されている形式には「-are-/-rare- (ru)」が付加され、有標であることが分かる。実際の言語使用においても、能動文の使用頻度が受身文よりはるかに多いことは先行研究（奥津 1992；仁田ほか 2000）ですでに指摘されている。動作主と対象が関与する事態において、動作主を主語にして普通の能動文で表現するより、わざわざ対象（被動作者）を主語にし、述語動詞に「-are-/-rare- (ru)」を付加して受身文で表現するのは特別であると考えられる。

益岡（1987）は「受動化することで何らかの意味が付加される」（益岡 1987:183）と指摘し、その特別な意味について、「或る存在が或る出来事の結果として心理的或いは物理的影響を被る」ことと、「或る対象が或る属性を有している」ことを明示することであると、意味論の観点から述べている。

一方、久野（1978）は受身文の表す「特別な意味」について、「視点（カメラ・アングル）」という概念を提唱し、「受身文では、わざわざ行為主体を主語の位置から外し、行為対象を主語の位置にすえるのであるから、話し手は、この構文パターンを用いる時は、何か特別な理由、即ち、行為対象に対する視点的な接近がなければならない」（久野 1978 : 163）と談話の観点から述べている。

(7) ?? その時、太郎が僕に殴られた。（久野 1978 : 146）

久野（1978）は（7）のような受身文が不自然なのは、以下の「発話当事者の視点ハイアラーキー」の談話規則に違反しているためであると指摘している。

発話当事者の視点ハイアラーキー
話し手は、常に自分の視点をとらなければならず、自分より他人寄りの視点をとることができる。

1＝E（一人称）>E（二・三人称）

（久野 1978：146）

要するに、日本語の受身文の機能を分析するためには、少なくとも、受動化がいかなる意味を付加するかという意味機能上の問題と、談話を構成していく中で何が文の主語に選ばれるかという談話機能上の問題の両方に注目しなければならないと考えられる。

3. 中国語の“被”構文の機能

(8) a. 他　打　了　　你。（王力 1985：87）
　　彼　殴る　le　あなた（彼があなたを殴った）
　b. 你　　被 他　打　了。（王力 1985：87）
　　あなた　被　彼　殴る　le　（あなたが彼に殴られた）

中国語の“被”構文について、王力（1985）は（8）a と（8）b を挙げ、（8）a の能動文では話し手が「他」（彼）を、（8）b の“被”構文では「你」（あなた）をそれぞれトピックに挙げて話しているとしている。また能動文と比べると、“被”構文は使用頻度や使用範囲がかなり限られており、能動文を“被”構文にすることで、主語に立つ被動作者にとって不愉快あるいは被害的な事柄を表す意味が生じると主張している。王力だけではなく、「望ましくない事態」を表すことが“被”構文の本来の機能であることはすでに中国語学では一般的に認められている事実である[3]。

「望ましくない事態」を述べるという意味を踏まえ、木村（1992）と Kimura（1997）は“被”構文の述語の特徴をさらに詳しく分析している。「中国語の受身文は、主語に立つ対象が単に＜動作・行為＞を受けることを述べるだけでは成立し難く、対象が動作・行為の結果として被る何らかの＜影響＞を明示的に表現するか、あるいは何らかのかたちでそれを強く含意するかたちのものでなければ成立し難いという性格をもっている」（木村 1992：10）と指摘し、述語（VP）の中で、他動性の高い「動詞＋結果補語」の VR 構造がプロトタイプであると Kimura（1997）は述べている。つまり、述語（VP）は結果を表す意味が強ければ強いほど、受動者への影響性の意味が高くなるため、“被”構文として許容されやすい。

また、“被”構文の主語の選び方について、杉村（2016）は一人称が動作主になる中国語の“被”構文に注目し、話し手がどのように事態を見ているのかという話し手の視点と関わる構文であると主張しており、話し手が動作主よりも被動作者に対して関心を持つために、被動作者を主語に昇格したのだとしている。さらに、古賀（2018）は中国語の“被”構文は話し手が当該の事象の参与者のうち被動作者を見ていることを示すとしている。

以上から、中国語の“被”構文では、主語が出来事から影響性を受けているという意味が表せるだけではなく、何を主語に立てるかという話し手の視点にも関わると考えられる。いわば意味的機能と談話的機能が両方働いているということである。

4. 調査方法

以上の先行研究から、日本語の受身文も中国語の“被”構文も、能動文よりコストのかかる特別な構文であり、このような特別な構文には意味機能と談話機能が両方働いていることが分かる。しかし、(4) と (5) が示しているように、“被”構文で言えない受身文、あるいは受身文で言えない“被”構文が存在する。このことから、受身文と“被”構文における意味機能と談話機能の表し方が、両言語において異なる可能性があるということが示唆される。意味機能とは受動化することによって文に付加される特別な意味のことであるが、述語にも関わっている。また談話機能とは何が主語に選ばれるかに関わる問題である。そのため、意味機能と談話機能がそれぞれどの程度受身文と“被”構文の使用に影響しているかを分析するために、両言語の述語と主語の特徴を分析する必要がある。

なお、何を主語にするかは文脈の談話構造に関わる問題であり、文脈から切り離した文単位のレベルだけでは適正な分析ができない可能性もある。そのため、本稿では日本語と中国語の現代のテレビドラマまたは映画の台詞から、受身文[4]と“被”構文を含む前後の会話を文字化し、それを研究対象とする。談話レベルでデータを収集しており、且つテレビドラマや映画から話し手の身振りや話し振りなども確認できるため、受身文と“被”構文が持つ機能の違いをより正確に考察できると考えられる。具体的には、両言語の主語と述語の特徴を量的調査に基づいて考察していく。なお、本稿のデータの詳細は以下の表 1 の通りである。（紙幅の都合上、次節における例文出典の表記にあたっては、表 1 のテレビドラマ/映画の名前の冒頭の一文字で表すこととする。）

表 1　データの概要

	日本語の受身文	中国語の“被”構文
出典	『最高の離婚』 （全 9 話、約 448 分） 『昼顔～平日午後 3 時の恋人たち～』 （全 5 話、約 243 分）	《情人结》（約 112 分） 《鬼吹灯之精绝古城》 （全 10 話、約 310 分） 《欢乐颂 2》（全 29 話、約 1189 分） 《五星大饭店》（全 30 話、約 1336 分）
データ量	約 691 分	約 2947 分
用例数（延べ）	185 例	164 例[5]

5. 調査結果

5.1　受身文と“被”構文の主語の特徴

前節でも述べたように、受身文も“被”構文も主語に関わる構文であり、話し手が被動作者を主語に選択するのは、それらに関心を持っているからである。しかし、何に関心を持つかは各言語の間では異なる点が見られる。主語の選択については、Silverstein（1976）と Dixon（1994）らによる名詞句階層が参考になる[6]。Dixon（1994）は言語の一般的特徴として、談

話の中では話し手が最も重要視され、その次が聞き手、その次がほかの人であるとし、下の「一人称＞二人称＞指示詞・三人称＞固有名詞＞一般名詞」のような話し手の関心の度合いに関わる名詞句階層（Nominal Hierarchy）を指摘している。つまり、この階層の左に位置すればするほど、話し手がより関心を持つため、他動詞文の主語（A-transitive subject）になりやすく、逆に右に位置するほど、話し手があまり関心を持たなくなるため、他動詞文の目的語（O-transitive object）になりやすいとされる。

1st person pronouns	2nd person pronouns	Demonstratives 3rd person pronouns	Proper nouns	Common nouns: Human	Common nouns: Animate	Common nouns: Inanimate

← more likely to be in A than in O function

（Dixon1994：85）

また、この階層は日本語の能動文と受身文の使い分けにも関係しており、動作が階層の左から右へ向かった場合には能動文が使用され、逆に動作が階層の右から左へ向かった場合には受身文が選ばれると角田（1991）で指摘されている。つまり、能動文であれ、受身文であれ、この階層の左のほうが右のほうより文の主語になりやすいということである。これは久野（1978）が主張する「発話当事者の視点ハイアラーキー」とかなり共通しているが、久野（1978）よりもさらに細かく分類されている。実際、二人称を主語とする日本語の受身文の数は三人称を主語とするほうよりも多かったことから（表 2）、Dixon（1994）と角田（1991）の名詞句階層を参考にするのがより適切であると考えられる。なお、本稿ではこの名詞句階層が表す主語選択の優先順位を「視点の制約」と呼ぶことにする。

次に、受身文と“被”構文の使用がそれぞれこの「視点の制約」とどの程度相関関係があるかを検証してみる。具体的に、日中テレビドラマや映画からそれぞれ収集してきた 185 例の受身文と 164 例の“被”構文のうち、主語に選ばれる被動作者（X）と対象に降格された動作主（Y）がそれぞれ「一人称」「二人称」「三人称」「無情物」のどれに属するかを同じ基準（下記）で分け、日本語と中国語の違いを対照する。

分類にあたって、X と Y が発話の中ですでに明示されている場合は、それを直接分類し、明示されていない場合は、前後の文脈によって確定する。なお、文脈からも確定できない、あるいは X、Y が複数の意味に捉えられる場合は「その他」に分類する。分類する際、日本語も中国語も以下の 3 つの基準に従った。

I. 間接受身文の場合、文で表されている動作によって間接的に影響を受ける主体を X として扱う。ただし、従属節あるいは連体修飾節における受身表現については、その節の中で表される動作の受け手と与え手をそれぞれ X と Y として扱う。

II.　「三人称」に分類されるものは話し手と聞き手以外で、かつ話にあがる有情物（人間）に限定されるが、「人」「人々」「誰か」といったような不定の人称も含める。

III.「無情物」に分類されるのは物体名詞、動物名詞、抽象名詞と出来事などである。

調査した結果は下の表 2 の通りである。項目名の横の行は X を示し、縦の列は Y を示している。また、「値」の各セル内では、一行目の「数（パーセンテージ）」が日本語の受身文、二行目の「数（パーセンテージ）」が中国語の“被”構文に該当する。例えば、X が「一人称」、Y が「二人称」、つまり「私があなたに～れる･られる」あるいは「我被你～」の文は、日本語では 22 例が得られ、全体の 11.9%を占めているが、中国語では全体の 3.0%にあたる 5 例しかないことが表 2 から分かる。

表 2　受身文と“被”構文の主語の特徴

値 X / Y	一人称	二人称	三人称	無情物	その他	合計
一人称	0（0.0%）/ 0（0.0%）	0（0.0%）/ 1（0.6%）	0（0.0%）/ 3（1.8%）	0（0.0%）/ 3（1.8%）	0（0.0%）/ 0（0.0%）	0（0.0%）/ 7（4.3%）
二人称	22（11.9%）/ 5（3.0%）	0（0.0%）/ 0（0.0%）	0（0.0%）/ 5（3.0%）	0（0.0%）/ 1（0.0%）	0（0.0%）/ 0（0.6%）	22（11.9%）/ 11（6.7%）
三人称	80（43.2%）/ 18（11.0%）	37（20.0%）/ 11（6.7%）	24（13.0%）/ 42（25.6%）	12（6.5%）/ 24（14.6%）	1（0.5%）/ 0（0.0%）	154（83.2%）/ 95（57.9%）
無情物	4（2.2%）/ 9（5.5%）	0（0.0%）/ 3（1.8%）	2（1.1%）/ 10（6.1%）	0（0.0%）/ 20（12.2%）	0（0.0%）/ 1（0.6%）	6（3.2%）/ 43（26.2%）
その他	1（0.5%）/ 1（0.6%）	0（0.0%）/ 2（1.2%）	1（0.5%）/ 1（0.6%）	1（0.5%）/ 4（2.4%）	0（0.0%）/ 0（0.0%）	3（1.6%）/ 8（4.9%）
合計	107（57.8%）/ 33（20.1%）	37（20.0%）/ 17（10.4%）	27（14.6%）/ 61（37.2%）	13（7.0%）/ 52（31.7%）	1（0.5%）/ 1（0.6%）	185（100%）/ 164（100%）

表 2 の「合計」の灰色の部分から明らかなように、日本語の受身文においては、主語の割合が「一人称（57.8%）＞二人称（20.0%）＞三人称（14.6%）＞無情物主語（7.0%）」の順に減少する傾向が見られた。一方、中国語の“被”構文には、そのような傾向は見られなかった。

また、Dixon（1994）や角田（1991）の説が正しければ、表 2 の左下のほうに行けば行くほど、「視点の制約」に従っており、右上のほうに行けば行くほど「視点の制約」に違反していることが言えるはずである。これを検証するために、「視点の制約」に従っている部分と「視点の制約」に違反している部分をそれぞれ太線と三本線で囲み、この 2 つの部分の受身文と“被”構文の数をそれぞれ合計した。結果は以下の表 3 の通りである。

表 3　受身文・“被”構文と「視点の制約」の関係性

	「視点の制約」に従っている例	「視点の制約」に違反している例
日本語	145（78.4%）	12（6.5%）
中国語	56（34.1%）	37（22.6%）

表 3 を見ると、「視点の制約」に従っている例では、日本語の数が全体の 78.4%を占め、中国語よりも圧倒的に多いことが分かる。「視点の制約」に違反している例では、中国語の数が全体の 22.6%と、日本語の 3 倍以上の割合を占めている。

また、「視点の制約」に違反している例では、日本語の 12 例はすべて（9）のような「X が無情物で、Y が三人称」である。なお、ここで注意されたいのは、動物を「無情物」に分類している点である。例えば、(9) の受身文が用いられているのは、「星野結夏」という人物が第三者に自分の家で飼っている猫について説明している場面である。これは話し手の「ウチの存在」と「ソトの存在」という観点から捉えれば、「視点の制約」に違反している例ではない。一方、中国語の「視点の制約」に違反している 37 例には、(10) のような「X が無情物で、Y が三人称」の例もあれば、例（11）の「X が無情物で、Y が一人称」のような「視点の制約」に最も違反していると言える例も見られる。無論、(11) を“被”構文に直訳すると、(11') が示しているように、とても不自然に感じてしまう[7]。

つまり、「ウチ」と「ソト」の観点から分類すれば、日本語は受身文の 80%以上が「視点の制約」に従っていると考えられるが、中国語にはそのような制約はない。（(9) ～（11）の各例において、波線と太字は X と Y を指すが、X あるいは Y が原文で明示されていない場合は括弧で補足している。）

(9)　星野結夏：（**うちの猫**は**人**に）捨てられてたんですよ。もっとも子どもだったときに、それを彼が拾ってきて。（最）

(10)　雪莉杨：这帮盗墓的，是苏联人？
お墓を盗んだのはソ連の人？
杨教授：　真是作孽啊，　**这么有研究价值的古墓**，
本当に罰当たりなことをして、　こんな研究価値のある古墳、
就这么　被（**他们**）　糟蹋　了。（鬼）
このように　被　めちゃくちゃにする　le　（こんなにめちゃくちゃにされた）

(11)　胡八一：真没想到，　时隔两千年，　**精绝古城的遗迹**，　就这么
思いもしなかった、二千年の時を超えて、　精絶古城の遺跡、　このように
被　**我们**　给　找到　了。（鬼）
被　私たち　给　見つける　le　（私たちに見つけられたよ）

(11') ＊ 思いもしなかった。二千年の時を超えて、精絶古城の遺跡はこのように私たちに見つけられたよ。

以上の調査から、日本語の受身文の使用には「視点の制約」が強く関わっており、「話し手のウチのもの、特に一人称を主語に立てるため」という談話上の機能が強く働いているが、中国語の“被”構文にはそのような談話上の機能が相対的に弱いと言える。中国語の“被”構文が使用される条件の一つは話し手が動作主よりも被動作者に対して関心を持つためであるが、関心を持つ理由はそれが話し手のウチのものであるためではなく、ほかに理由があると考えられる。これについては 5.2 節で詳しく述べたい。

5.2 “被”構文と受身文の述語の特徴

湯廷池（1977）ですでに指摘されているように、特定の出来事を叙述することが中国語の“被”構文の目的であり、過去、現在や未来を総括する一般的テンス（generic tense）はほとんど表れない。そのため、中国語の“被”構文の述語は単独の動詞で表されることがほとんどなく、動詞の後ろに“了”や回数・動量・期間・程度・方向・結果補語といった動作の完結あるいは結果を表す成分が必要である。前述のように、Kimura（1997）も述語には結果を表す意味がなければ、“被”構文として許容されにくいと主張している。

そこで、実際の会話のデータを用いて、先行研究で述べられている完結や結果を表す成分が“被”構文と共起するかどうかを検証してみる。検証の対象は表 1 で示している 164 例の“被”構文である。

“被”構文の述語動詞の後ろに“了”、“过”もしくは回数・動量・期間・程度・方向・結果・場所などを表す補語が現れた場合は「①完了相/補語あり」とし、述語動詞の後ろに“了”、“过”あるいは補語などが一切現れず裸の動詞のみで現れた場合は「②動詞のみ」とし、それ以外の場合は「③その他」と分類して、それぞれの類に属する“被”構文の数を合計した。結果は表 4 の通りである。

表 4　中国語の“被”構文の述語の特徴

述語の特徴	例	数（割合）
①完了相/補語あり	掏空了、扯进这摊浑水里、说得我有点难受呢	137（83.5%）
②動詞のみ	打、甩、啃、误会、打扰、嫌弃、迷惑、照顾	16（9.8%）
③その他	熏的，劈的，笑话啊，活埋吧，抓壮丁	11（6.7%）

表 4 から明らかなように、述語が「①完了相/補語あり」の“被”構文の数が「②動詞のみ」で終わる受身文の数よりも圧倒的に多く、全体の 83.5%を占めている。つまり、中国語の“被”構文は（12）～（14）の二重線で示しているように、常に何らかの形で動作の完結、あるいは被動作者が事態から影響を受けてどうなったか/どうなっているかという結果を

言語化しているのである。逆に（12）～（14）の二重線の部分を削除してみると、文が終わっていないように聞こえてしまい、以下の（12'）～（14'）のような不適格な文になる。

(12)　王凯旋：还能怎么办啊，　　这回咱俩是抓瞎了，　　这十里八乡的，

もう仕方ないんだよ。今回はまったく行き当たりばったりだ。周りのいくつかの村は

全　被　考古队　　给　掏　　空　　了。（鬼）

全部　被　考古のチーム　給　取る　なくなる　le（全部考古のチームに取られちゃったのよ。）

(13)　魏国强：她自己都不知道她要出事儿了，　　可是我早就预感到了，

彼女自身でさえ何か起きるとは気がついていなった。でも私はずっと前からそんな予感がしていた。

反正婚也离了，没有 被　她　扯　　进　这　滩　浑水里。（欢）

どうせ離婚したし、ない　被　彼女　引っ張る　入る　この　量詞　濁っている水の中

（この泥水に引きずり込まれることもなかった。）

(14)　邱莹莹：樊姐，我本来都打起精神来了，　　怎么　被　你　说　　得

姉さん、私はもともと元気を出していたけど、なぜか　被　あなた　言う　補語を修飾する助詞

我　有点　难受　呢。（欢）

私　ちょっと　悲しい　語気詞　（なぜか今姉さんに言われてむしろちょっと悲しくなってきた。）

(12')　＊　还能怎么办啊，这回咱俩是抓瞎了，这十里八乡的，全被考古队给掏。

(13')　＊　她自己都不知道她要出事儿了，可是我早就预感到了，反正婚也离了，没有被她扯。

(14')　＊　樊姐，我本来都打起精神来了，怎么被你说。

一方、「②動詞のみ」で終わる“被”構文は非常に少なく、延べ 16 例のみであった。これらの文、例えば（15）と（16）が無理なく成立できるのは、複文構造（主節ではないこと）や、動詞自体の性質（被害が含意されていること）などに関係していると考えられるが、紙幅の都合上、詳しい議論は省略する。

(15)　律师：我们现在更加相信，　　杨悦　被　打，　是跟盛元公司有关了。（五）

私たちが現在より信用できるのは、楊悦さん　被　殴る　盛元グループと関係があるということだ。

（楊悦さんが殴られたのは）

(16)　安迪：我　不在乎　被　她　误会。

私　気にしない　被　彼女　誤解する（私は彼女に誤解されるかどうかなんて気にしない。）

我向她道歉也只是承认我的错误，　　我并不是想挽回什么。（欢）

彼女に謝るのはただ自分の非を認めるためってだけで、決して何かを取り戻したいわけではない。

すなわち、実際の会話の中で、裸の動詞が述語として現れた“被”構文も見られるが、数は非常に少なく、ほとんどの場合、述語動詞の後ろに完了相あるいは補語が現れているということが明らかとなった。完了相や補語がよく使用されるというのは、被動作者がどう影響

されたかという結果や、被動作者が影響を受けてどうなっているのかという状態などを常に“被”構文で叙述しなければならないためであると考えられる。言い換えれば、中国語の“被”構文が使用される条件の一つとして、共起する述語（VP）が、被動作者が動作主からの影響を受け、何か物理的あるいは心理的変化を起こした/起こしているという出来事を表していなければならないのである。しかし、日本語では被動作者に及ぼす影響性や結果をまったく言語化しなくても成立できる受身文がしばしば見られる。

(17)　星野結夏：横山さんに会った？お店の、本社から来た人。すごい仕事できんの。
　　濱崎光生：ちょっと挨拶された。（最）　（＝（4）a）

(18)　星野結夏：上原さんに懐かれてんの？
　　濱崎光生：知らないよ。（最）

(19)　濱崎光生：婚姻届どうしたんですか。
　　上原諒：はい？
　　濱崎光生：証人頼まれましたよね、僕。（最）

（17）と（18）は「濱崎光生」と「星野結夏」という夫婦の間の会話である。（19）は隣人同士の「濱崎光生」と「上原諒」との間の会話である。これらの受身文ではいずれも被動作者が動作を受けたことによって、何か物理的あるいは心理的変化が生じたことを明確に言語化しているとは言えない。例えば、（17）の「濱崎光生」という人物が妻の「星野結夏」の質問に対して、「（僕は横山さんに）ちょっと挨拶された」と受身文を用いて答えているが、「挨拶された」後、自分に何か変化が生じたのか、あるいは「挨拶された」結果、どうなったか/どうなっているかについては一切言及されていない。（18）～（19）も同様である。

これらの受身文は中国語の“被”構文に直訳すると、かなり不自然になる[8]。なぜなら、（17'）～（19'）の“被”構文から被動作者が動作から何か影響を受けた/受けているという意味が極めて読み取れにくいためであると考えられる。つまり、（17）～（19）の日本語の受身文は中国語の“被”構文で表現する意味的条件を満たしていないのである。

(17')　＊　我　被　横山　打了招呼。（＝（4）b）
　　僕　被　横山さん　挨拶をした

(18')　??　你　在　被　上原　套近乎　吗？（筆者訳）
　　あなた　動作の進行や持続を表す副詞　被　上原さん　懐く/なれなれしくする　語気詞

(19')　??　我　被　你　拜托　当　证婚人，对吧。（筆者訳）
　　僕　被　あなた　頼む　担当する　証人　でしょう

以上の考察から、中国語の“被”構文には「被動作者が影響を被って何らかの結果が引き起こされたことを表す」という意味機能が強く働いているが、日本語の受身文にはそのような意味機能はそれほど働いていないことが分かった。

6. まとめ

以上、3 節までは主語の選択に関わる談話機能と、述語にかかわる意味機能が日本語の受身文と中国語の“被”構文の使用上同時に働いているが、両機能の現れ方に違いが見られるということを述べた。4 節と 5 節では、談話機能と意味機能がそれぞれどの程度受身文と“被”構文の使用に影響しているかを検証するために、受身文と“被”構文の主語及び述語の特徴を量的・質的の 2 つの方面から考察を行った。

結果を簡単にまとめると、受身文と“被”構文の使用において、日本語は「意味機能」よりも「談話機能」を重視するが、中国語はその逆で「談話機能」よりも「意味機能」を重視すると結論づけることができる。つまり、日本語は「話し手のウチのもの、特に一人称を主語に立てるため」に受身文を使用するが、中国語はそれだけのためにまったく影響性の読み取れない出来事を“被”構文で表現することはしない。一方、中国語は被動作者に何か変化や結果が生じた意味を表すために“被”構文を使用するが、日本語はそれだけのために話し手のウチのものを降格して、ソトのものを主語に立てて受身文で表現することはしない。

なお、今回は主に「話し手の視点」と「結果状態の明示」という 2 点を中心に、受身文と“被”構文の違いを分析したが、他にも人称代名詞の使い方も両言語の受身文の使用に影響していると考えられる。例えば、「彼が私のことを嫌う」という出来事に対して、中国語では“他讨厌我”のように人称代名詞をそのまま利用して言語化するが、日本語では「嫌われている」のように人称代名詞を一切使用せず受身文を用いるだけで話し手と事態との関係を表すことができる。また、受身文だけではなく、「～てくる」あるいは「～てくれる･もらう」といった補助動詞を用いることも、視点を話し手のウチのものに固定する方法の一つとされているが、人称代名詞の不使用にも関わっていると考えられる。つまり、「視点を話し手のウチのものに固定すること」、「人称代名詞を使用しないこと」と、「受身文（あるいは補助動詞）を使用すること」の三者の間には何らかの関連性があると考えられる。これについては今後の課題としたい。

参考文献

＜日本語＞

大河内康憲（1983）「日・中語の被動表現」『日本語学』Vol.2, 4 月号 pp.31−38 明治書院

奥津敬一郎（1992）「日本語の受身文と視点」『日本語学』Vol.11, 8 月号 pp.4−11 明治書院

木村英樹（1992）「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』1992 年 6 月号 pp.10−15 内山書店

久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店

古賀悠太郎（2018）『現代日本語の視点の研究』ひつじ書房

陳冬姝（2016）「受身文からみる日本語と中国語の談話構成の特徴―中日・日中対訳データに基づいて」『日本語・日本文化研究』第 26 号　pp.127-138　大阪大学大学院言語文化研究科　日本語・日本文化専攻

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版

仁田義雄 村木新次郎 柴谷方良 矢澤真人（2000）『文の骨格　日本語の文法 1』岩波書店
益岡隆志（1987）『命題の文法―日本語文法序説』くろしお出版

＜中国語＞

Kimura Hideki（1997）漢語被動句的意義特微及其結構上之反映，《Cahiers de linguistique – Asie orientale》 vol. 26（1），pp. 21–35

杉村博文（2016） 汉语第一人称施事被动句的类型学意义，《世界汉语教学》, 2016 年 01 期 pp.3–15，北京语言大学

刘月华・潘文娱・故韡（2001）《实用现代汉语语法（增订本）》商务印书馆

吕叔湘 朱德熙（1951）《语法修辞讲话》第三讲 开明书店

湯廷池（1977）《國語變形語法研究 第一集 移位變形》臺灣學生書局

王力（1957） 龙果夫序注《汉语语法纲要》新知识出版社

王力（1985）《中国现代语法》商务印书馆

＜英語＞

Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sliverstein, M. (1976) Hierarchy of Features and Ergativity, In R.M.W. Dixon (Ed.), *Grammatical categories in Australian languages*, pp.112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies. [Republished as pp.163-232 in *Features and projections* (1986), ed. by P. Muysken and H. van Riemsdijk. Dordrecht: Foris.]

---

[1] 中国語の受身文には介詞を用いた「“被”構文」と、介詞を用いない「意味上の受身文」の二種が存在すると言われている（王力 1985；刘月华ほか 2001 など）。しかし、「意味上の受身文」はトピック文との区別がつきにくく、受動の意味が捉えられない場合もあるため、本稿では「“被”構文」のみを中国語の受身文として取り扱うこととする。なお、本稿で取り扱う“被”構文とは、主節や連体修飾節に関わりなく、“被”だけでなく“叫”“让”“给”などの介詞が述語動詞の前に現れる文も含める。

[2] （4）b と（5）b の下線の文の「許容度」に関して、本稿ではそれぞれ中国語母語話者 5 名と日本語母語話者 5 名に対して調査を行った。この調査では、文の許容度を「自然」「やや不自然」「不自然」と「とても不自然」の 4 段階に分け、それぞれ 1 点、2 点、3 点、4 点と点数化する。前後の文脈を調査者に説明した後、（4）b と（5）b のそれぞれに点数をつけてもらった。例文ごとに平均値を四捨五入し、平均値が 2 点の場合は「?」、3 点の場合は「??」、4 点の場合は「*」をつけた。また、（11'）～（14'）及び（18'）（19'）の許容度に関しても同じ調査を行った。

[3] 現代の中国語には“我被教授夸奖了”（私は教授にほめられた）のような被害を表さない“被”構文も見られるが、本稿では王力（1957；1985）、吕叔湘 朱德熙（1951）、大河内（1983）、刘月华ほか（2001）などと同じ立場をとり、被動作者への被害（影響性）が“被”構文の本来の機能であると考える。

[4] 日本語の受身文を収集する際、主節であるか連体修飾節であるかは考慮に入れていない。また、否定文や「テイル」文が使用されている用例もすべて含めた。

[5] 本稿で収集した“被”構文 164 例のうち、“被”“叫”“让”“给”でマーカーされている文の数はそれぞれ 152 例、0 例、10 例、2 例であった。

[6] 名詞句の階層については、各先行研究で取り扱う言語対象によって異なる側面から解釈がされているが、本稿ではその詳細については触れず、Dixon（1994）と角田（1991）の主張を採用することにする。

[7] 実際、（11'）の許容度について日本語母語話者 5 名に（4）b と（5）b と同様の調査を行ったところ、全員「とても不自然」と答えた。

[8] （17'）～（19'）について、調査者の中国語母語話者 5 名は全員能動文で表現するほうがより自然であると指摘した。